
魔法戦記リリカルなのは異伝 光と闇の勇者

桃Kan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのは異伝 光と闇の勇者

【Nコード】

N8773V

【作者名】

桃Kan

【あらすじ】

ここではない世界、一人の男が力を求めて戦乱の世を駆け抜けていた。彼は自らの力を認めぬものたちと袂を別ち、代々伝わる伝説の武具を手にし出奔。そこから物語の火ぶたが切って落とされる。これは魔法少女リリカルなのはとSDガンダム外伝のクロスオーバーの作品となります。

きっかけ

「はあ……はあ……ッッ!!」

「うおおおおお!!」

二人の武士がそれぞれの刀をぶつけ合う。

飛び散る火花でさえ、彼らからふりみだされる鮮血でさえ、その戦いを彩るモノとなっている。

しかしそのような雄々しくも素晴らしい戦いの最中、朱塗りの鎧に身を包んだ武士は煮え切らない、納得のいかない表情を見せていた。

「……何故だ！何故なのだ！！私たちが、仲間同士が戦い合う理由などないだろう、真悪参!!」

刀をいなし続けながら、彼は必死に説得を試みていた。だがもう一方、背に白銀の盾を携えた武士はこう返す。

「五月蠅い！貴様などに、皆から認められた貴様などに分かるはずもないだろう!!」

より激しさを増していく彼らの演舞。周囲にそれを見守る者は一人としていない。否、そうではない。彼を、真悪参と呼ばれた武士を追いかけてきた者は数多に居た。

しかしその総てが今彼と相対している武士、武者頑駄無を除いて打ち倒されてしまったのだ。

「こんなことをせずとも、君は強さを持っているのではないか？」

「ならばなぜ……何故俺には貴様たち、七人衆と同じ地位が与えられない!？」

ただ認められたかった。まるで駄々を捏ねる子どものように、刀を振り回す。

相対する武者頑駄無にはそう見えて仕方がなかったのだ。

確かに真悪参は大きな力を持っている。しかしそれだけに過ぎないのだ。まだ彼の精神はあまりに未熟……それを見抜いていたからこそ、将頑駄無は彼に何も与えようとはしなかった。ただ傍に置き、成長を見守っていたのだ。

「君は——自分勝手すぎるぞ!!」

振り上げた刀を一閃、武者頑駄無は自らの繰り出すことの出来る最速の速さで振り下ろす。それこそ、彼が七人衆の筆頭と言わしめる一撃。

どれだけ真悪参が手練であろうともそれを受け止めることは難しいだろう。

「グウツツ!」

たとえ受け止めたことが出来たとしても、手にした得物が耐えることはできないだろう。

「……ッ!」

苦痛に耐える声と共に、刀身の大半を砕かれた刀が地に落ちる。周囲に赤々とした鮮血が零れ落ちる様を見ながら武者頑駄無は刀を納め、自らの手を真悪参に差し出した。

「さあ、共に戻ろう。今なら皆、君を許してくれるはずだ」

その手がどれだけ暖かなものであったか、それは真悪参もちろ
ん理解することは出来た。そこから伝わってくる武者頑駄無の優し
さと強さを、彼はハッキリと感じ取ることが出来ていたからだ。
しかしそのことを理解していたとしても、彼には出来なかった。

「——るさい、五月蠅い、五月蠅い!!」

その優しい手を取ることを、彼は出来なかった。

「何故なんだ！俺と、貴様に……：どれほどの違いがある！？何故……
俺は勝つことが出来ない!!」

それは武者頑駄無に対する負の感情。出生も身分も、そして同じ
く武者としての道を歩んできたにも関わらず、あまりに大きく開い
てしまったその強さに対する嫉妬。

その感情が、真悪参に素直になることを認めさせなかったのだ。

「勝てないというのなら——」

「な……：！本当に、それを使おうと言うのか!？」

払いのけた手をそのままに、彼は背に携えた白銀の楯をその手に
持つ。

白銀の曇りなき輝きを、彼の腕から流れ落ちる血の赤々とした色が
冒していく。それはまさに、真悪参の心に浮き彫りになってしまっ
た感情を現しているようですらある。

「——真悪参、分かっているのか!？それは……!!」

「お前に、勝つために……：より強大な力を手に入れるまでだ!」

雄叫びを上げる真悪参に呼応するように、手に持つ武具はカタカ
タと音をたてて鳴り響く。それらはまるで、それぞれ意思を持つよ
うに光を放ちながら、その存在感を示していた。そう。それこそ彼

らの所属する軍、『頑駄無軍団』において“伝説”まで呼ばれる武器の輝き。その名を『白銀の楯』、そして『銀狼剣』。
真の勇者が持つことを許されるという、頑駄無軍団屈指の秘宝である。

「さあ、武者よ、続きを始めよう！俺はお前を超える……そして真の“勇ましき者”になるのだ！」

より鋭い視線を武者頑駄無に向けながら、構えを取る真悪参。その立ち居姿からは、先程まで滲みでていたはずの迷いは一切ない。必殺を心に誓った武士、ただ一人がそこには立っていたのだ。

「分かつては、くれないのか。真悪参……」

悔しそうに言葉を発し、顔を伏せる武者頑駄無。ただ仲間と共に、守るべきモノを守り通す武者になることを誓っていた彼にとって、真悪参の所業は到底理解出来るものではなかった。

しかし彼の眼光は瞬時に力を取り戻し、刀を抜き出しながらこう答えた。

「ならば君を、倒してでも連れて帰る！これだけは譲れない！！」

「その決意すら、切り伏せるまで！」

最早それ以上に言葉はいらなかった。

互いの怒号と共に切り結ばれる刀と刀。

その時あまりに大きな力の奔流のために、起こりえるはずのないことがこの時生じたことを、まだ彼らは知らなかった。

そう。その切り結ばれた互いの得物は嵐を吹かせ、雷を呼んだ。そ

して稲光が瞬いた瞬間、それは起こった。

「——なッッ！」

「こっ、これは——！」

突如、二人の間を隔てるように一閃の稲妻が大地に降り注ぐ。

それは轟音をたてながら、周囲の木々を燃やし岩を砕き、そして最後には白銀に輝く楯と剣を持つ武者に降り注いだ。

「——早く逃げるのだ、真悪参——！」

大声を上げ、真悪参を救出しようと詰め寄る武者頑駄無。しかし大地を揺らし続ける稲妻が、彼の行く手をまるで阻止するかのよう

に降り注ぎ続ける。

「ッ！このままでは——！」

武者頑駄無は稲光に目をくらまされながらもどうにか目を凝らし、真悪参の下へと行く手立てを考え続けていた。

「な……！笑って、いるのか？」

そして彼は目にしたのだ。銀狼剣を掲げながら、嬉しそうに稲光の向こう側を目にする真悪参の姿を。それはかつて、初めて武者に任ぜられた時の表情、そのものであった。

次の瞬間、一層凄まじい光が周囲を覆い、武者頑駄無の視力を奪った。

それはすなわち、彼が完全に真悪参を見失ったことと同義であった。

「……消えて、しまった」

それから幾ばくかの時が過ぎた。周囲は降り注いだ雷のために焼け焦げ、先刻までの姿はどこにもない。あまりに変わり果てた大地を目にしながら武者頑駄無は一人、光の中に消えていった真悪参のことを思い、静かに手に持っていた刀を鞘に収めた。

「私には思えないのだ。君がああ光に討たれ、黄泉の世界へと旅立つてしまったなどとは……」

天を仰ぎ彼は呟く。それは刀を打ち交わした相手だからこそ分かる、どこか確信にも似たモノであった。

そして武者頑駄無はゆっくりと視線を落とし、踵を返してその場を後にした。

“せめて次に会うときは、互いが真の勇ましき者にならん”

そつ心に誓いながら。

きっかけ（後書き）

初めまして！桃Kanと申します。

今回は好きなモノをクロスオーバーさせたらどのようなのか、その試みの下、書きすすめていこうと思います。

誠心誠意励もうと思いますが、お見苦しい点もあるかと思っています。その際はご指摘いただけると嬉しいです。

それでは、次回を待て！

黄金の意志

そこが何処なのか、それを知るものは誰もいない。

いやもし居たとすれば、それは最早一つの個体としての“生命”を凌駕した存在。

詰まる所、“神”と呼ばれる存在だけだろう。

形容しがたいその空間をただフワリフワリと特異な存在が一つ、行くあてもなく漂っていた。

—ああ、そうだ……俺は、稲妻に身を打ち抜かれて……—

ぼんやりとしながら、ソレは思いを馳せた。

かつて走り回ったあの草原、全てを包み込むように広がる蒼穹を。あの頃はただ、ただ走り回っているだけで、空を見上げているだけで楽しかった。

そして友と共に修練に励み、力をつけることが何よりの喜びだった。

だがいつの頃からだっただろう……同じように育った者たちが、自分の先を歩いていく。自分を置いてけぼりにする。

ただ置いていかれたくなかった。ただ共に並び立ち、信じる者のために刀を振るい続けたかったのだ。それを何時しか別の、暗い感情が自分を覆っていた。

“自分の方が強いはずなのに！”

“俺を、この力を認めてはくれない！？”

“何故俺だけが……こんなにもみじめな思いをしなくてはいけないのだ！！”

しかしそれもはや過去の出来事。

今やその身体は感覚を失い、そこに自分が個体として存在するのも認識できないほどにまどろみ、意識が琴切れるのを待つだけになっていた。

―これは、罰なのか？―

己の私利私欲に走ったから。仲間であつたはずの、守るべき者たちを傷つけてしまったから。悔やんでも悔やみきれない行いを自分がしてきたことは明白。

それを償うすべさえ、それさえも許されることはないのか。

だから素直にソレは目を閉じた。

自分が消え去るのだと、諦めを抱きながら。

―心に光と闇と秘めし者よ……―

―何だ……一体誰なのだ？―

目を閉じた刹那、何かがソレに語りかける。

消え去るのみと覚悟していた心に、少しの希望が差し込まれた。

―汝の心の在りようこそ、我が操主に相応しい―

―何を言っている？……もしや、貴様が俺を此処に誘ったか！？―

声は一方的に、話しかけることを止めなかった。まるで総てが予定された物語の上を進むように、声は質問には答えようともしない。そう。この時に気付くべきだったのだ。声が如何なる存在であるかを。

―しかし、まだ足りぬ―

―質問に答えろ！？返答次第では、この剣の錆としてくれよう！―

閉じかけた目をカッと開き、ソレが声に反論する。

力を込められた手には白銀に輝く楯と剣。身体には蒼塗りの見事な鎧を身にまとい、ソレは怒号をあげながら声に向かって、こう宣誓した。

「俺は、武者頑駄無真悪参！！逃げも隠れもしない！故に声の主よ、俺の前にその姿を示し、俺と戦え！！」

眼光鋭く、声の響く先を見据える真悪参。

しかしそこに在ったモノ。それはあまりに形容しがたい、おおよそ生命とは呼べるものではなかった。

―確固たる意志、そして自らの闇の部分に気付く事の出来る勇氣

……しかし、その勇氣を支えるモノが足りぬ―

「……お前は、なんだ？」

真悪参はそれを目にし、動揺を隠せずにいた。

真白の空間の中でも存在感を示すその輝きに、彼は目を奪われていた。そして気が付けば、剣を楯に収め、こう呟いていた。

「——黄金の……意志」

そのあまりの存在感をそうとしか言葉にすることが出来なかった。そしてその言葉が、遙か遠くの未来で意味を為すことを真悪参は決して知らない。

「しかし……しかし、そんなものが私に何のようなのだ!!」

——汝に足りぬモノ、今はそれを求めるために進むのだ——

「何を言っているのだ!俺の質問に答えろ!」

黄金の意志と呼ばれた声の不可解な言葉に、声を荒げながら詰め寄ろうとする真悪参。掲げた手で必死に黄金の意志を捕らえようと手を伸ばす。しかしその手は届くことはなく、ただ空を切る。

「——なっつ!!」

その声も、その手すらも届くこともなく、真悪参は身体をどこかに吹き飛ばされるような感覚を覚えた。真白なる空間は一気に幕を落としたように暗闇へと姿を変え、真悪参の意識を奪っていく。

それは真悪参の旅立ちを意味していた。

彼が勇ましき者として、世界に立つために重要なモノを得るための最初の試練なのである。

——旅立つのだ、我が操主となるべき者よ——

真悪参が試練を受けるべく向かう先に何があるのか。それは黄金の意志にしか分からないだろう。

海鳴市、邂逅

その日はあいにくの雨。

その中を足早に駆けて行く人。傘をさしながら友人たちと楽しそうに会話をする人。様々な人が自分の目的地に向かって歩を進めている。

「——雨、だな」

少年が一人、鉛を垂らしたように重い空を見上げながら嘆息する。彼にとつて今日は久しぶりの何も無い日。普段ならば母の営む喫茶店の手伝いをしているのだが、今日はそれも休みをもらっていた。少年の母曰く、彼は働き過ぎらしい。たまにはのんびりとしてくれば良いと言われていたのだが、少年には別段時間を浪費出来る遊びは思い浮かばなかったのである。

「……歩くか」

そう一言呟いて彼、高町恭也は雨の中をゆつくりとした歩調で進み始めた。

目的地などはない。ただ気の向くままに、ただ足を進めるだけ。雨のせいもあるのだろう。こうやって歩いていれば何処からともなく知人が声をかけてくるのだが、今日はそんなこともない。あまりに穏やかで、静かな時間が彼を取り巻いていた。

「――流石に誰もいないか」

宛てもなく歩いたからだろうか、恭也は気が付くと臨海公園まで足を延ばしていた。

流石にこのような天気の中では、公園の敷地内には人の影すらない。これだけ人がいないということは逆に新鮮なことだなどと思いを巡らせながら、彼は視線を海の方に向けた。

視界いっぱい広がる荒々しくその風景に、彼の表情は年相応の子どものようなものへと変わっていた。瞳をキラキラと輝かせ、どこかその雄々しくも荒々しい海に心を惹かれているようであった。

そんな風景を楽しんでいた中、ガチャリと何かの落下音が彼の耳に届いた。自然と視線がそちらへと向かう。

「ん？あれは……」

その光景に恭也はどこか違和感を覚えた。

それは何時からそこに在ったのだろうか。それは雨に濡れ、力なくその場に倒れこんでいる。自分がそこを通った時には、その姿を確認することも出来なかったのに。

それ以前にこれが“生き物”なのかどうかも、雨で視界も悪いため即断できるものではない。しかし一点だけ、確かなことがあった。

「……人じゃ、ない」

そう口にしながら、自身の中の警戒度を高めつつ一步一步、それに足を進めていく。

普段からの癖であろう。恭也は不可解なモノ、初めて見るモノに対してはどうしてもある一定の警戒を持って接してしまう。

妹たちならばこんなことはない、やはり自分は弱いままなのだろう

と自らを自嘲しながら、恭也は倒れこんでいたモノの前でその足を止めた。

倒れこんでいたのは、生き物ともロボットとも見て取れるモノだった。

しかし奇妙なことにそれは武士のような鎧兜に身を包み、背には一目見ただけでもかなりの業物と理解出来る楯と剣を携えている。

「危険なモノなのか……これが起きて、騒ぎを起こす可能性もあるか」

鎧姿の武士を見下ろしながら、恭也は不測の事態が起こらぬようにするための最善の策を思索し始める。だがそれほど時間もかからず、彼は行動を開始していた。

恭也は差していた傘を閉じ、武士を背に担いでゆつくりと来た道を戻り始めた。

答えはあまりにシンプルだった。

『道に倒れた者をそのままにするなんて、父親ならばそんなことはしない』

『もし危害を加えるような者ならば、自分が身を呈して討ち倒せばいい』

自分の憧れる父親ならばどうするか、彼なりに出した答えがそれだった。

「今日はずくづく、奇妙な目に逢う日だ」

少しだけ苦笑いを浮かべながら、恭也は歩く。

その日、この時、彼は出会はずのなかった人物と出会った。それが本来起こりえるはずもないことだと、気付かぬままに。

——高町家、道場

鮮やかな西日の差し込む道場。

そこには鎧兜を脱がされ、軽装状態となった一人の武士の姿があった。そんな彼も、未だ眠りの中に在り、響くのは規則正しい寝息のみ。

しかしそんな彼にも、ようやく覚醒の時が訪れようとしていた。

「んっ……ここ、は？」

ギシギシと痛む身体を起こしながら、その武士、真悪参は周囲を見渡す。

どこか馴染み深い造りの建物、そして綺麗に磨きこまれた床、ここはよほどきちんとした人物によって管理されているのだろうと彼は感心しながらも、何故こんなところに寝かされていたのかを必死に考えていた。

仮にあの戦いで武者頑駄無に敗北したならば、自分は牢に捕らわれているはず。だが彼は何の拘束もなく、この見覚えのない場所で寝かされていただけ。しかも、どうしても真悪参にはあの戦いがどのような結末を迎えたのか思い出せずにいた。

「なんと見事な修練場よ。これだけの規模のものは、天宮でもそうはないだろう」

そう呟きながら彼は立ち上がり、道場に漂う精悍な空気を楽しんでいた。

そもそも慢心はあれど、自らの技を磨くこと、より高みを目指すことにおいて、真悪参は誰よりも誠実な男であった。彼にとって、こ

のような道場は何よりも落ち着く事の出来る場所だったのである。
しかしここにジツとしているわけにもいかない。幸いにも自分の
鎧兜、そして白銀の楯は寝ている傍に置かれていたため、逃亡の支
度は簡単に整えることが出来る。
そう考えながら、自身の鎧に手をかけようとした時であった。

「——なんだ、もう動けるのか」

その声は何の前触れもなく、真悪参に投げかけられた。
否、それよりも問題なのは、その声の主が何時から道場内にいたか
ということだ。事実真悪参には、声の主の気配を感じとることは出
来なかった。姿形をハッキリと目にしたわけではない。しかし一つ
だけ、ハッキリしていることがあった。

“危険だ”

真悪参がそう感じた刹那、その身体は自らの武器を握るために、反
射的に動き出していた。

「——ツツ!!」

「——」

しかし真悪参が白銀の楯に手を触れるよりも早く、彼の首筋に宛
がわれる指先。

そう。声から察するに道場の入り口にいたはずの声の主は、数秒と
かからずに真悪参の傍まで移動し、彼の動きを制していたのだ。

「……貴様、一体!」

「なるほど、言葉が分かるのか。どうやら生き物には違いないんだ
な」

真悪参は恐る恐る声の主の方に視線を移そうとする。

そして彼の眼に飛び込んできたのは、自分の知るものとはあまりにかけ離れた、生き物の姿だった。

「き、貴様、妖怪の類か何か!?」

「いや……俺から見れば、お前の方が妖怪に見える」

その間の抜けた受け答えに、殺気をぶつけ合っていた真悪参と声の主は思わず苦笑しながら、警戒を緩めた。

互いに直感したのだろう。このままぶつかり合っては、互いに傷を負うだけであろうと。だからこそ、まずは互いに話をするべきだろうと。双方にそれぞれの思惑はあれど、最初の衝突はここで幕を閉じた。

これが二人の、あまりに姿形の違う二人の男の出会い。

一人は、自らのために力を得ようとした者。

もう一人は、大事な人たちを守るために力を欲する者。

今この時、物語は動き始めた。

武者頑駄無真悪参と高町恭也、そして未だ自身の内に秘めた力に気付かぬ少女にとって重要な出会いであることを、彼らは知らない。

海鳴市、邂逅（後書き）

第三話の更新です。

ようやくとらハ……といふかなのはから恭也の登場です。

一応とらハとなのはは原作を知っているので、書きすすめてみたんですが、もし恭也のキャラがおかしいなどありましたら、ご指摘いただけると嬉しいです。

では次回の更新でお会いいたしましょう。

海鳴市、対話

道場が落ち行く日の朱色に染まる中、あまりに違う二人の男は互いに向き合いながら、自分たちの事について話していた。

この世界の常識から見ればロボットと人間の会話。それはあまりに奇妙な光景で、恭也という人物を知るものがそれを見たら、驚きの声をあげていただろう。

かくいう真悪参自身もこの少年、恭也と名乗ったこの少年を見上げながら不思議な感覚にかられていた。見た目は普通の子ども。しかし放たれていた殺気は子どもの放てるそれとは、全く別次元のもの。武者七人衆や将頑駄無、そして闇軍団の手練の者たちにも引けを取らないモノだった。

さらにこの状況は、真悪参にとっては頭を悩ませる状況に変わらなかったのである。

気が付けば自分は全く見知らぬ土地にいた。そればかりか、この世界の『人』は自分の世界の者たちとは全く姿形が違う。これではそう簡単に出歩くことも出来ないだろう。

「——どうした、ガンダム」

「……ん？俺のことを呼んだのか、高町？」

難しい顔をして黙りこんでいた真悪参に、言葉を投げかける恭也。真悪参してみれば、あまりに慣れていない呼び名に困惑しながら、すぐさまこう返した。

「俺のことは『真悪参』と呼んでくれ。その呼び方は……あまり好きではない」

「そうか。でだ……これからお前は どうするつもりだ？」

真悪参を見据え、眼光は一切の嘘を許さない。先程までの友好的なモノとは一変した恭也の態度に、真悪参はたじろぎながらも素直にこう返した。

「む……高町の言う通り、ここは俺の世界ではないのだろう」

真悪参にとって、恭也を見ればそれはハッキリ分かることだった。彼の、時折見せる穏やかな顔。それはこの世界が多少の衝突はあれど、平和の中にある証。

今もなお戦乱の中に在る天宮では、そんな表情を出来る人間はそうはいない。事実、真悪参の知る範囲でもそれを繕わずに出来るのは、あの朱塗りの鎧の武者だけだった。

「ならば、俺は自らの力を高めるため、修行をするのみだ」

幸いにも、今の自分と拮抗出来る者と共に居るということも、真悪参にとっては大きな収穫だった。

だからこそ、真悪参は強く思ったのだ。どうしてもここに居なくてはならないと。

「失礼なのは承知している。暫く！暫くの間、ここに厄介になることは出来ないだろうか」

居住まいを正し、彼は恭也に向き直って深々と頭を下げる。その光景を目にし、恭也は視線を外に向けながら考えていた。本当に、真悪参の申し出を受けてもいいのかと。

事実今の高町家は猫の手も借りたいほどに切迫した状況である。店はどうにかはなっているが、妹や父親のことを考えると真悪参の存

在はかなり心強いものだ。

しかし今日初めて会った、しかも人間とは似ても似つかないような生き物を信用して本当にいいのだろうか。彼にとってはその判断がどうにも出来なかった。

「俺だけでは、判断は出来ない」

「何っ！！それでは俺は……」

目を見開き、恭也に詰め寄りながら声を荒げる真悪参。

彼には確信があった。この少年の近くにいれば、自分は強くなれると。きつと武者頑駄無以上の使い手になることが出来るということ。だからこそ彼は必死になって、恭也に懇願していたのだ。

「だから、意見を聞きに行く。お前も来るんだ」

真悪参の執拗な言葉に耳を貸さず、あくまでマイペースなまま恭也は立ち上がり、道場の出口を目指した。

「どっ、何処に行こうというのだ!？」

真悪参は語気を強めたまま、再度疑問をぶつける。

恭也が一体何をするのか、そして恭也が決断を委ねる人物とは誰なのか、真悪参にとっては分からないことばかりであった。

そんな真悪参に、恭也は背を向けたままこう答える。

その姿はどこか憧れのヒーローについて語る、無邪気な子どもの表情に似ていた。

「———今から、俺の父さんに会いに行くのさ」

「まったく、一体この状況は何なのだ？」

もう日も沈みかけた暗がりの中、二つの影が先を急ぐ。

影の主、真悪参は恭也のあとを追いながら、そんな風に小言を洩らしていた。そもそも何かおかしい。堂々と街を闊歩しているというのに、誰一人としてすれ違うことがない。真悪参の目から見ても、この街は十分に栄えている。だというのにこの状況を『偶然』という言葉で捨て置く事は出来なかった。

“ 高町恭也……やはり只者ではないのか？ ”

恭也の足が止まったのは、真悪参がそんなことを考えていた時であつた。目の前には白く、大きな建物がそこにはあり、その存在感を露わにしている。

「なんと……これは凄まじい」

「何を驚いている？早く行くぞ」

驚嘆の声をあげる真悪参を後目に、恭也は館内に足を進めていく。確かに恭也から見れば当たり前前の光景であろうが、真悪参にとっては全く違う。

自分が足を踏み入れた建物も、天宮の天守かそれ以上の高さを誇っている。そこから考えるにこの世界は自分の世界と比べ、かなり技術的に発展しているのだと真悪参は思い至っていた。

「この中では静かにするんだぞ」

「——言われずとも」

コツコツと、規則的な足音が廊下に響いていく。

反響するそれがどこか、迷宮へと誘う音色のように真悪参には感じられた。

そう。彼にはこの場所がどこか戦場に似ていると感じられたのだ。人の感情がしみ付いている、悲しみも喜びも全てを内包しているとブルブルと震える拳を抑えながら歩いていると、ようやく恭也がその足を止めた。

「……ここだ」

目の前には白い扉。それを目にした時、真悪参は得も言われぬ感情に襲われた。

自然と口元が歪む。

感情が高揚していく。

自分を自制することが出来ない。

それは戦場にいた時、武者頑駄無と戦っていた時に感じていたモノと同一。

「さあ、入るぞ」

真の“強き者”がそこにいる証拠だった。

「ああ、珍しいじゃないか。こんな時間に一人……いや二人かな？」
「なっ……なんだと!？」

扉を入った瞬間、真悪参は自身の目を疑った。

彼は確信していたのだ。きつと、この部屋の中にいるのは強靱な精神と肉体を持つものだろうと。しかし、目の前にいたのはそれらは全く別の人物だった。

「……真悪参、紹介する。俺の父さんだ」

恭也の指し示したその人物は身体の大半を包帯で覆われ、おおよ

そ強き者とは呼べない。しかしそんな姿であつてもその人物から感じられる威圧感、真悪参がこれまで出会った人物の中でも一際大きい。

「初めまして……高町士郎です」

それは真悪参が知る中で、一番の力を持つであろう人物だったのだ。

海鳴市、高町家の日常

朝、家の中にバタバタと忙しない音が鳴り響いている。

台所からは朝食の支度をする音。

そして道場からは、二人の男の互いの得物を打ち鳴らす音。

幾度目かの木刀の衝突。

鐔迫り合いに持ち込みながら、互いが互いの隙を窺い続ける。一方は速度を武器とする剣士。そしてもう一方、言い表すならば『豪』の剣を駆使する武士。

どちらかに隙が出来た瞬間、再び激しい刀の衝突が繰り広げられるであろう。双方にその確信があるからこそ、互いにこの状況に慎重にならざるを得ない。

「——ッ！」

その均衡を破ったのは武士、真悪参であつた。

彼は理解している。自分自身では目の前の剣士の速さに通用しないと。だからこそ自分に利のあるはずの『力』でもって、これを打倒する。それ以外に彼が勝つ方法などありはしないと。

掬い上げられる剣士の木刀。胴ががら空きに事を視認し、真悪参は一気に肉薄せんと足に力を籠める。剣士と彼の身長差はおよそ30センチ。つまり懐に入ることも、真悪参にとっては“跳びこむ”ことと同義。つまりそれは自分自身も完全に無防備な状態になってしまうことを意味していた。

「これ……でっ……！」

必殺を誓いながら、剣士の胴目掛け刃を横薙ぎに振るう真悪参。

そう。いつもこの瞬間までは彼は自らの勝利を確信している。それを、自らの慢心からくる驕りとも知らずに。

「——なっ！」

言葉と同時に空を切る真悪参の木刀。彼はハッキリ分かっていたはずだった。“剣士の武器は速度である”と。

真悪参が木刀を振りぬいた刹那、剣士は既に彼の後方にいた。

剣士が駆使する流派、『小太刀二刀御神流』の前では真悪参の速度など、意味を為さない。力対力の純粋な勝負ならば真悪参にも勝ち目はあつただろう。しかしその一点で戦いに雌雄が決することなどはあり得ない。

そう。それをシツカリと理解していた剣士、高町恭也の方が真悪参よりも上手だったのである。

「——終わり、だな」

背後から木刀を突き付けながら、恭也は諭すように呟く。

「……そのようだな」

切っ先からは微塵の油断もない。恭也の強さを再確認したことも大きな収穫だと自らを納得させながら、真悪参は木刀を床に手放した。

あれから、恭也と真悪参が出会ってから数日目の朝を迎えていた。恭也と出会い士郎との面会を済ませた後、真悪参はあっさりと高町家の一員となっていたのだ。何故こんなにも簡単に高町家に迎えられたのか、真悪参には分からないことだらけであった。士郎は一言、『恭也が良いなら問題ない』と答えただけで彼の本当の狙いが一体何なのかも把握は出来ていない。しかし真悪参にとってそのことは瑣末なことであり、むしろ士郎からの許可は僥倖だったのだ。

「恭ちゃん、真悪参さん、二人ともお疲れ様」

そう言いながらタオルを二人に投げ渡したのは、恭也の妹である高町美由希。

この少女も恭也と士郎同様に、強さを秘めた人間の一人だと真悪参は判断していた。しかも異形のものである真悪参をあつさりと受け入れる豪胆さは、真悪参の方が驚かされたものである。

「ああ、悪いな美由希」

「もうご飯出来てるよ。桃子母さんもなのはもキッチンで待ってるから早く行こう」

そう言い残し、足早に道場を去っていく美由希。それを目にした二人は少し苦笑いをしながらその後を追った。

今日も一日が始まる。既に真悪参にとって当たり前となってしまうたこの世界での一日が。

「あら、二人とも。今日も朝稽古？」

リビングに入っただけですぐに声をかけてきたのは、士郎の妻であり恭也の母でもある桃子だった。ニコリと笑顔を浮かべたまま、彼女はもうすぐ準備が出来ると告げながら、二人をテーブルに誘導している。

その言葉に二人は頷きながら椅子に腰かける。真悪参というロボットののような姿の者がいるにも関わらず、いつもと変わらない朝の風景がそこにあった。

しかし、一つだけその風景に馴染めない者があった。

「おお、なのは。今日も母上の手伝いか」

「あ、はい……」

その少女、なのはは怯えながらも、真悪参に言葉を返していた。この家族の中にあつて、この少女だけは自分に恐怖を抱いているのだらうと真悪参は感じていた。それが当然の反応であるだらうし、真悪参自身もそれに不満があるわけではなかった。

しかし彼にとつて、“怯えたままでいられる”ということは、どうしても納得できるものではなかった。

「なーのーはー、何緊張してるのー？」

「あ、お姉ちゃん！」

パツと花の咲いた表情を浮かべながら、なのはは美由希にギュッと抱きつく。

その姿を目にし、まだこの家に馴染めていないようだと真悪参は少し落胆した表情を隠しながら、正面に向き直っていた。

「どうした真悪参？」

「ああ、気にするな。瑣末なことだ」

恭也の言葉にさらりと言葉を返し、食卓に並べられた食事に手を合わせる真悪参。その姿に恭也は違和を感じながらも、見て見ぬ振りをした。

そもそも彼は鈍感な人物ではない。なのはと真悪参、二人が上手くいつていないということは十二分に分かっていた。しかしこれくらいの問題を解決できなければ、二人は成長できないだらうと恭也は考えていたのだ。

「さあ、いただきましょか」

ようやくテーブルの椅子に腰かけた桃子の言葉に、ようやく高町家の朝食が開始される。これが今日も高町家の面々の、忙しない一日の始まりの風景であつた。

「さて、鍛練の続きだな……」

恭也たちを送り出し真悪参は一人、道場に戻って瞑想を開始しようとしていた。

この時間帯から夕方まで、高町邸には彼一人になる。衣食住を提供されている立場では、家の事を何もしないなどというのは礼儀に反するということで、最低限の家事を請け負っていた。そしてそれ以外の時間帯は常に道場において、自らの鍛練を欠かさずにいたのである。

恭也と美由希、そしてなのはの三人はそれぞれ『ガッコウ』という場所に勉強に励みに行っているとのことだった。その中でもなのはは最近『ガッコウ』に通い始めたらしく、まだ慣れていないようだと言っていた。

それにしても、三人がいなくてこんなにも静かになるのかと思いつながら、彼はゆっくりと道場の中へと足を進め、その中心に立つ。

「この世界の子どもは、忙しいのだな」

そんな独り言を呟きながら中心に座し、目を閉じる真悪参。そして思い浮かべるのは、早朝の恭也との仕合について。

身長差、体格差、確かに様々に要因はあるだろう。しかし真悪参も異世界では猛者中の猛者。一人の相手に負け続けるほど、愚かではない。だが実のところ、恭也との仕合において、彼はまだ一度たりとも勝利していない。

あの瞬間、恭也に肉薄しようとした時、確かに真悪参は恭也の姿をしっかりと捉えていた。それにも関わらず、次の瞬間には恭也を見失い、そればかりか背後を取られる始末。

——一体、俺に何が足りないのか……—

そう考えながら、真悪参は様々な状況を想定しながら恭也に勝つ方法を模索していた。しかし結局のところ行きつく答えは、“あの速度に追いつくしかない”ということのみ。

あの速度を叩きだす身体の運用方法は、おそらく幼少の頃から培われてきたからこそ為すことが出来るのだろう。そうだとするならば、彼の技を目にして数日しか経っていない真悪参にとって、それを再現することは至難の業である。

「駄目だ……この方法では勝てない」

真悪参らしからぬ言葉が道場に響く。しかし見開いたその瞳は、諦めるということを知らないように鋭く輝いている。

ククつと声も洩らしながら、真悪参はゆっくり立ち上がり腰に据えた刀を抜き出す。

それを静かに正眼に構え、正面に打ちこむ。

床を蹴る音に続き、刀の空を斬る音が道場いっばいに響き渡る。それはまるで先程までの弱い自分を切り捨てるかのようにであった。

「そうだ……強くなるのだ」

口にしたのは彼の心に刻んだ決意。その言葉を嘘にしないために、彼は幾度となく刀を振るい続けた。

そんな時であった。ガラガラと道場の戸が開く音が響いたのは。

「——おお、早いではない………どうしたのだ、なのは!？」

戸の開いた先、そこにいたのは涙に頬を濡らすなのは姿だった。その涙が、真悪参となのはの運命を大きく動かしていくことを、まだ二人は知らない。

海鳴市、踏み出す一歩で

目の前には必死に涙をこらえる少女の姿。

どうにかしたい。何故涙しているのかを理解したい。そう思えても不器用な、刀を振るうことしか知らない彼にとって、それはあまりに難しいことだった。

彼はなのはに近付きながら、たどたどしい口調でこう尋ねた。

「一体、どうしたというのだ？なのはらしくないではないか？」

しかし真悪参の言葉になのはが答えることはない。

ただ懸命に涙を堪えようとする姿がそこにはあった。次第に嗚咽が止んでいき、いつも美由希や恭也、桃子に見せるような笑顔を見せ、こう返した。

「ごめんなさい……ちょっと泣いちゃっただけなんです。なにも、問題ないですから」

「——いや、そうではないだろう？」

なのはの言葉を即座に斬って返すように、真悪参は呟いていた。真悪参は知っている、この少女が“少しばかりのこと”で涙を流すような子どもではないと。この子には強い信念としっかりとした芯を持っていると。

出会ったばかりであろうと、どれほど怯えられていようと、真悪参はなのはをそう評価していたのだ。

「なのは、確かに俺たちは出会ったばかりだ。しかし俺にはお前が理由なく泣く子どもではないと思う」

「そんな……こと」

正面になのはを見据え、真悪参が諭すように語りかける。

その言葉にハッと息を飲み込みながら、彼の顔を見上げるなのは、それは今まで自分が必死に隠してきたこと。彼女が泣く理由は一つしかなかったのだから。

「俺は刀を振るうしか能のない男だ。力にはなれんかも知らんが、聞くくらいのことは出来る」

柔らかな言葉が道場に響き渡る。

これまでの彼ならば確実に言うことの出来なかった言葉を、無意識のうちに真悪参は口にしていた。この世界に来て、そして恭也たちと関わる内に彼も少しずつ変化していつている証が、確かにここにあった。

投げかけられた言葉に戸惑いの表情を見せながら、なのはは恐る恐る言葉を返す。そこからはやはり、遠慮がちな様子が見て取れた。「……でも、いいの？ガンダムさんに迷惑かけちゃう。それでもいいの？」

「——構わん。先も言ったが力になれんかもしれん。だから話すのはお前の自由さ」

そう言うと、真悪参はその場に座し、ジッと外を眺めていた。なのははその表情に、どこか父親や兄と同じ暖かさを感じそこに腰かけた。そして少しの沈黙の後、ようやく彼女は泣いていた本当の理由を話し始めた。

「……悔しいの」

彼女は語る。周囲の人は凄く優しいと。

母も兄も、姉も……そして学校の友達もみんないい人ばかり。父のことは確かに心配だが、でもきつと良くなるって信じている。寂しいわけじゃない。一人が嫌なわけじゃない。

嫌なことがあるとすれば、それは自分の自身。

今をどうにかしたいと思っっているのに、それが出来ない。学校で虐められている子がいたのに、それを見ているしか出来なかった自分が悔しい。

どうにかしたいと思っっているのに、その“勇気を踏み出す一步”がどうしようもなく怖い。

だから悔しくて泣いた。絶対に一人の時にしか泣かないと決めていたのに……。

「——なるほど。その場面に俺が出くわした、ということなのだな」
「うん、ガンダムさんに見られて少し……恥ずかしいかな」

一しきり話し終えた後、なのはの顔からは先程までの陰りは失われていた。普段同様に明るい笑顔がそこにはあり、真悪参もそれを目にして思わず表情を和らげてしまう。

その瞬間、真悪参の頭に、一人の武者の姿が浮かぶ。今にして思えば、あの武者もなのはと同様に、人のことを第一に考え、自分の傷付く事を厭わない人物だったなと彼は思い出していた。二人を重ね合わせながら、真悪参はゆっくりとした口調のまま、なのはを見ながら呟く。

“もう、答えを見付けているのだろう”と。

理由は分からなかった。ただあの武者ならば、きっとそんな局面に出会った時、人に泣きごとを洩らしながらも既に答えを見つけているだろうと、真悪参は思い至ったのだ。

「……どう、なのかな。まだ分かんないや」

ニコリと笑いながら、なのはは視線を少しずらす。どこか物思いにふける様なその表情に、あと一押しだなと、真悪参は木刀を手に取りながら立ち上がった。

そして道場の中心まで歩を進め、ゆっくりと構えをとる。

そして次の瞬間、空を斬る音と共に彼はまるで宣誓するかのように、大声をあげていた。

「勇気など、後からついて来るものだ！迷うだけならば誰にでも出来る。しかしそこで踏み止まっていては、いつまでも何も変わらない！」

木刀を振り続けながら、真悪参は話し続ける。

太刀筋に呼応するようにその声はより大きなものに、その踏み込みはより鋭いものになっていく。

彼は語る。自分は不心得者だったと。いつしか自分の欲にかられ、仲間を蔑ろにしていたのだと。強さを求めるあまり、自分の内面に目を向けるよりも先に外面ばかりを、身分ばかりを気にしていた。そして周囲との差を意識するに従い、自分の中に暗い感情が芽生え始めた。今、その感情を捨てきれたかといえば嘘になる。事実、土郎や恭也と出会い、より強くなれるのではないかと考えたのだから。しかし語る言葉に嘘はない。それは武者との、恭也との戦いから自分が学びとったことだから。不器用な自分が、得ることの出来た

一つの答えだから。

「——だからお前はお前の最善と思う行いをすればいい……己の心の信じるままに」

構えを解き、息を整えながら呟く真悪参。そこには戦場を一人駆け抜けていた頃の荒々しいだけの姿ではなく、どこか達観したような武人の姿があった。

そう。彼は気付いたのだ。自分が見失っていたものを。見失っていたことにすら、気が付かなかったものを。

「信じる……ままに」

刻み込むように、その言葉を口にした少女は再び笑顔を見せ、真悪参の元に歩み寄る。何かを決心したように、そしてそれを言葉にするために。

「ガンダムさん、ありがとう」

「礼など必要ないさ……むしろ俺が礼をしなくてはならないな」

互いの顔を見つめながら、大声を出して二人は笑う。

どこか兄弟の触れあいにも似たその光景を、そして真悪参が語った言葉を、なのはこれから先、忘れることはない。

それは次の日、顔に痣を作りながらも、『友達が出来たよ』と自慢げに笑う彼女の姿がその証であった。

時間は移り、ある朝の風景。

そこには木刀を振り下ろす真悪参と、それを興味深く眺める恭也の姿があった。

「なあ、真悪参」

「なんだ、修練の最中に」

苛立ちを隠さず、得物を振り下ろす音と共に、真悪参は返答する。それに構わず道場の主は言葉を続けていく。

「なのはのこと、励ましてくれたのか？」

「いや……俺は何もしていない」

ぶっきらぼうにそう答えながらも、どこか表情はやんわりとしたものに変わっていく。その変化がどこかおかしく、恭也は声を抑えながら少し笑う。

「人が答えてやったというのに！何たる無礼者よ！！」

キツと恭也を睨みつけ、真悪参が吠える。ずいと詰め寄りながら、彼は切っ先を真悪参に向けながら、さらに声を荒げた。

視線を向けあったまま、動くことはない。注意深く互いの隙を窺いながら、二人は沈黙し続けた。

「……まあ良いだろう」

幾ばくかの時が流れ、先に動きを見せたのは真悪参であった。

いつものように木刀を振り下ろすのではなく、彼はそれを収め恭也の脇を抜け、道場の出口へと足を進める。

その歩みゆく姿は、どこか今までの真悪参の姿とは少し違う。それが何かは恭也にはすぐ看破することは出来なかったが、彼にとってそれは頼もしく思えた。

「なあ、真悪参……お前、変ったよ」

横に並びながら、再び恭也は真悪参に声をかける。どこか嬉しそうに投げかけられた響きに、真悪参は視線を向けずにこう切り返した。

「何も変わっていないさ。いつも通りの俺は、俺だ」

そう言葉にしながら、彼は笑顔を見せていた。

きつと彼自身、自分が笑みを浮かべていることに気付きはしなかっただろう。

だがそれを恭也は見逃さなかった。そして恭也自身も笑顔を浮かべ二人は一路、家族の待つキッチンへと向かうのであった。

しかし彼は、真悪参はまだ知らなかった。

もう既に自分が、重要なモノを得たことを。

そしてそれは、この世界からの旅立ちを意味しているということ。

海鳴市、旅立ち

―時は……近い―

“これはきつと、夢なのだろうな”

どこで目にしたかも定かでないそれを前に、真悪参は確信にも似た感覚を覚えていた。そしてもう一つ、彼の脳裏に浮かんでいた言葉がある。

しかしその言葉を口にしてしまえば、きつと現実のものとなってしまう。今の彼にとって、それは何を投げ打つても拒否しなければならぬことなのだ。

だからこそ、苛立つ。自分を巻き込んだ、目の前の身勝手な存在に。しかし、感謝もしている。それに遭遇しなければ、今の自分はなかったから。

“それが運命なのか？俺でなくてはならないのか？”

その存在は、彼の問いに応えることはない。何をしようと、どれだけ真悪参が憎悪を胸に抱こうと、それは真悪参に語りかけることしかない。

それがあまりに悔しく、そしてなにも出来ない自分に歯がゆさを感じながら、真悪参は拳を握り怒号をあげる。その響きはまるで、彼の心からの願いそのものであった。

“もう、もう奪わないでくれ！俺の積み上げたモノを、奪わないでくれ！！”

「……そうか、そうだったな」

そう呟きながら真悪参が身体を起こしたのは、まだ夜と朝の境の時であった。彼はこの世界に降りたつてから頑として身につけることのなかった自らの鎧を身に纏い、寝室を後にする。その瞳は何かを覚悟したかのように真摯な色を秘め、真っ直ぐに自分の行く道を見つめていた。

本当にそれでいいのか？後悔は何もないのか？

歩を進める度に彼の中に疑念が渦を巻いてゆく。その問いに答えを見出すことも出来ず、彼はただある場所を目指して足を動かし続けた。自身の心に宿った悔いを、少しでも振り払うために。

「ここだ。……ここが俺の始まりの場所なのだ」

真悪参が足を運んだのは、やはり彼がこの世界で一番時を過ごした場所であった。

そこに居れば、少しは考えが纏まるであろう。そんな楽観的な思いを持って彼はそこに足を踏み入れた。しかしその場所でも、彼の疑念は晴れることはない。

むしろこの静寂の中に一人身を置く事が、より彼を深い闇へと落としこむ要因となっていたのだ。

「——時間がないのか」

この世界に来て数ヶ月、彼は多くのことを学びとってきた。

一人の少年との偶然の出会いから、強さの本当の意味を、少女の無

垢な涙から、他を慈しむ心を得た。

きつとそれらは天宮で、戦場の中で彼が少しずつ失くしていった大事なもののたち。将頑駄無は、七人衆は常にその心を持っていたから、あれだけの強さを発揮できたのだらうと、彼は理解出来る。

そして今、彼の心にはある確信が渦巻いていた。それはこの世界からの旅立ち。徐々にはあるが、彼は思い出していたのだ。自分がこの世界にやってくる直前の事を。

あの日武者との戦いの最中、自身に降りかかった稲妻。そして形容しがたい空間で出会った“黄金の意志”の事を。

「あれは言った……足りないものを得よと」

投げ出した言葉は受け取り手もなく、ただ道場に響く。

もうひと時、せめて少しの間この世界に留まることが出来れば。

悔しさから拳を握りこむ。その痛みに耐え抜く事が出来たとしても、きつと自分はこの世界から去ることを拒否することは出来ない。

だからこそ、去る時は誰にも見送られることなく、一人で静かに去っていく。真悪参はそう思いながら瞳を閉じ、踵を返して道場を出ようと歩き始めた。

「——こんな夜中に、何をしている？」

道場の外から響く声に、真悪参は思わず顔をあげる。

いつだっただろう。その声の主と初めて言葉を交わしたのも、同じような場面であった。ただ違うのは彼らを包む静寂の空気。互いに穏やかに、そしてどこか絆すら感じるものの出来るその雰囲気、二人は思わず声をあげて笑っていた。

「まったく、神出鬼没とはまさにこのことだな」

「確かに……しかしこんな時間に何をしているんだ？」

真悪参は声の主、高町恭也の脇を抜けながら、彼の顔を見ずに話し始めた。恭也は彼の雰囲気にとどこか違和を感じながら、再度同じ質問を投げかける。

「ああ、少しばかり出かけようかと思ってな……」
嘘ではない。その返答は真悪参にとって決して嘘などではなかった。

彼自身この世界にとっては、“偶然招かれた客”。それがまたどこか別の世界に行くことになるのだらう。だから、彼のその言葉は何の偽りもないのだ。

真悪参の姿を見ながら恭也は嘆息し、『少し待っている』と伝える。そして彼は道場の中に入っていった。その後ろ姿を見送りながら、真悪参は恭也の意図を汲み取れないままだった。それどころかこの瞬間にも彼の言葉に従わず、ここから立ち去ろうとすら考えていたのだ。

「待たせたな、真悪参」

そう呟き真悪参の元に帰ってきた恭也の手に握られていたのは一振りの刀。それを目にし、自身の恭也に対する警戒を最上級にまで引き上げる真悪参。

「すまない、ただたまには真剣を握らないと感覚が鈍るんだ」

真悪参の変化を感じ取ったのか、恭也はそう呟きながら刀を掲げる。しかし真悪参の口からはギクシャクとした返答ばかり。

そう。彼には分かっていた。恭也の言葉が嘘であることが。直感していたのだ。きっと恭也が刀を手にしたのは、『自分の望みを叶えてくれるためだ』と。

「少し歩かないか？」

恭也は静かに言葉を投げ出す。

そして彼の足は真悪参の返答を待たず、ゆつくりと家の外へと向かって動き始めていた。その後ろ姿を目にし、真悪参は彼と出会ったばかりの頃を思い出しながら苦笑する。

あの時は右も左も分からないまま、真悪参は恭也に着いていくだけだった。しかし今は違う。真悪参の決意を、恭也が後押ししようとしている。

共に歩いていく姿からは、確かな絆を感じさせていた。

「ああ、そうしようか」

そして今から始まるのは、一人の武士が旅立つための、手向けの戦いなのだ。

二人が歩いた先。そこは初めて恭也が真悪参を見付けた場所。

「覚えているか？」

「……どこか懐かしい感はあるな」

静寂が周囲を包んでいた。街灯に照らされたベンチに二人、腰を降ろしながら声が響き合う。

二人の眼前に広がる海は、まるで真悪参の心を表すように穏やかに、時に不安定に波の音をたてる。その響きを聞きながら、真悪参は確信を持ってこう呟いた。

「そうか、ここが俺の最初に降り立った場なのだな」

その瞳に光が宿る。それまで揺らいでいたはずの彼が、ついに決意した合図。

真悪参はベンチを離れ、海に近付きながら空を見つめて話し始めた。

「俺は、強さを求めている」

「……知っている」

その言葉に優しい口調で返す恭也。

恭也は思う。出会ったばかりの、それこそ抜き身の刀のような雰囲気
を漂わせていた彼を。

この世界に来る前の彼が、どれだけ自分自身を痛め付けていたか、
想像するに容易い。しかし彼は同時に思う。彼は日に日に変わって
いったと。

「だがな、強さとは『力』だけのものではない」

振り返り、真悪参は言葉を紡ぎ続ける。

「それを教えてくれたのはお前であり、なのはであり……お前の家
族だ」

それはこの世界でなければ、高町家の面々と共にいなければきつ
と気付く事も出来なかつただろう。真悪参は恭也に一歩近づき、正
面から彼を見据える。決して視線を逸らすことはない。

「感謝はしているのだぞ。しかし不器用でな……どう恩に報いるべ
きか分からん」

自分なりの感謝の言葉を口にする真悪参。その言葉に恭也は真剣
な表情を崩さず、こう切り返した。

「ここに居ればいい」

それは恭也の願いだった。自分が、家族が彼によってどれだけ救
われてきたのか、言葉に表すことの出来ないほどに、真悪参の存在
は大きなものになっていた。

これが我が儘だと分かりながらも、恭也はそう口にするしか出来な
かつたのだ。

「——出来ん」

「何故だ！俺と美由希、父さんと母さん。そしてなのはと一緒に暮

「らせばいい！」

「出来ん！」

「何故だ！答える真悪参！！」

自らの主張を曲げようとしない二人。互いを思いやるからこそ、彼らはここまで頑なに自身の意志を通そうとする。そして恭也の言葉に真悪参はグツと堪えて押し黙り、少しの沈黙の後、先程までとは違う静かな響きで言葉を返した。

「俺は、『招かれざる者』なのだ。ここに居てはきつと世界に不都合が起こる」

一瞬顔を逸らしながら言葉にする真悪参に、恭也は彼の方に手を置き、力強くこう語りかけた。

「そんなことは気にするな！俺がいる、父さんがいる……家族も、お前のことも守る！」

その言葉にハッと顔をあげる真悪参。未だかつて、彼が他人からそんなことを言われたことはなかった。しかしその優しい言葉を、受け入れたいはずの言葉を真悪参はどうしても飲み込むことが出来ない。悔しそうな表情を見せながら、再び真悪参は言葉を発する。しかし表情ほど言葉からは、迷いや悔しさは感じられなかった。

「恭也よ……俺は一人の男であり、武者なのだ」

「……知っているさ」

それは真悪参が、真悪参たる証明。

誰にも曲げることの出来ない、誰にも否定することの出来ない彼自身の証明なのだ。

「だから行かせてくれ。それに俺はきつと……」

ゆっくり恭也との距離をとりながら、真悪参は呟く。

その行動に、その言葉に恭也は何を感じ取ったのだらう。彼も同じ

ように真悪参との間合いを取り、隠していた得物の柄に手をかける。

「——ああ、分かった」

「ありがとう……恭也」

二人が向き合う。それは会話をするためのものではなく、互いの技と技をぶつけ合うため。互いの存在の証明を刻みつけ合うため。

「——武者頑駄無真悪参、参る！」

「——ハアアッ！！」

背に担いだ白銀の楯に左手に、真悪参が一地进行蹴る。

しかしそれを上回る速度で恭也は得物を袈裟に振り下ろす。楯を持つてその一閃を受け、楯に据えた銀狼の剣を抜き、反撃に転じようとした時であった。

いつか真悪参の身体に降り注いだ光の柱が再度、彼に降り注いだのは。

「——まさか……」

それは一瞬の出来事であった。

光の柱が降り注いだ瞬間真悪参の身体は、恭也の視界から消え去った。

「こんな唐突なこと、あっていいのか……」

彼は手にした刀の柄をグツと握りしめながら、悔しそうに言葉を洩らす。それは戦えなかったからではない、大事な友人が消えてしまった。そのことが悔しくてならなかったのだ。

「どうしてだ、どうしてなんだ、真悪参！」

言葉が虚空に消える。

それが物語の第一幕の終わりを告げる音。

他を守ろうとする優しい心

他を妬む心。

そしてそれらを自分自身として受け入れた武人は、運命に導かれるままにかの地を目指す。

“何故だ！何故こんなことを！”

―行こう、彼の地へ……―

“許さん……何があっても、俺は貴様を許さん！”

―いずれ彼らともまた会える時が……何っ！？―

“グアアアアアアア！！”

―まさか！ここまで卑劣な行為をするのか、古代神よ！―

それはここではない世界。

「ど……何処なのだ……ここは？」

甲冑を身につけた騎士が一人、茫然と立ち尽くしていた。

「ここは……私は、私は一体……」

そう。何も思い出せない。自分が一体何者であったのか。そして何故ここに居るのかすら。

―ガ……ムさん―

彼の頭の中に、何か声が響く。あまりに懐かしい、しかしどこで聞いたか忘れた声。

「そうだ…私は」

―……ガンダムさん―

「私は、ガンダム……ガンダムなのだ！」

騎士は嬉しそうに瞳を輝かせ、自分の名前を呟く。
まるで刻み込むように、頭に響いた声さえ忘れないように。

そして伝説は、幕を開けるのだった。

海鳴市、旅立ち（後書き）

これにて第一章の終りです。

これ以降は、リリなの視点でお話が続く……はずです。
また感想の方お待ちしております。

それでは、次回を待て！

思い、空へ

この世界には、色んな人の願いがあつて

時にその願いは誰かを救つたり、傷つけたりする。

傷つく事を恐れてちや、傷つけることを恐れてちや、きっと前には進めない。

その勇気がないと誰にも出会えない、触れあえないって教えてくれた人がいたから。

わたしは自分を曲げない。今のわたしの、この気持ちを信じているから。

魔法少女リリカルなのは、始まります。

「——ヤアアア！」

いつの頃からだっただろうか、この少女が兄や姉と共に朝の鍛練に参加するようになったのは。

「なのは、もつとしつかりと踏み込むんだ」
「はいっ！」

少女は木刀を手に声を大に応える。

汗を振りみだしながら、より鋭くより力強く、少女は自身の得物を振り下ろし続けた。

少女の兄、高町恭也はその姿を見ながら考えていた。何故この子がこんなにも強くなろうと努力するのか。

お世辞にも『武』の才覚があるとは言えない、むしろ駄目な側に近い。それだというのに、彼女は必死に鍛練を積み続けている。何かに囚われ、追い立てられるように。

―きつと、アイツのせいなんだろうな―

恭也の脳裏に、一人の武人の顔が浮かぶ。それはたった数ヶ月の出来事であった。

まるでロボットのような、しかし誰よりも武人であった者との出会い。彼のおかげで恭也自身も更なる研鑽を積む機会を得ることが出来た。

そして、少女も……。

「なのは、まだ悲しいか？」

「ん？何、おにいちちゃん？」

恭也の方に向き直りながら少女、なのははニコリと笑顔を見せた。その仕草からは、まだ何も知らない年相応の少女のものであった。

「……いや、何もないよ。さあ、そろそろ学校に行く準備をしよう」
恭也は何かを語ろうとして、グツと口をつぐんだ。

おそらくそれはあの武人のこと。兄である恭也ですら、彼のことを思い出すと様々な感情にかられるのだ。まだ幼いのはが何も感じないわけがない。

彼はそんなことを考えながら自身の汗をぬぐい、そそくさと外に向かって歩き始めた。その後ろ姿を見つめながら、なのはは呟く。

それは恭也に届く事はなく、ただキラキラと日の光射し込む道場へと消えていった。

「——悲しくないわけ、ないよ……」

真悪参が姿を消し、二年の月日が経とうとしていた。

あまりに唐突の旅立ちに、高町家の面々は驚きを隠せず、皆悲しみに頬を濡らした。もちろん末っ子であるのはもそれは同様であった。泣く時はいつも誰もいない場所で泣いていたはずの彼女が、この時は脇目もふらず、ただただ泣き続けたのだ。

そして泣き終えた彼女の瞳には、どこか強い光が宿っていた。それは真悪参の出会いがあったからこそ燈った光。彼との日々を決して忘れないように、そしてより自分らしくあるために、彼女は強くなることを選んだ。

過酷であろうと、教えてもらった勇氣の意味を信じて。

「だから、わたしは負けないの」

その決意を胸に、少女は今日も毎日を生きていく。これから自身の運命が加速していくことも知らずに。

「いつてきまーすっ」

学校へ行く身支度を終え、元気よく外に飛び出す。今日は少し鍛練に時間を使い過ぎてしまったかなと苦笑しながら、彼女はいつもの通学路を駆け抜けていく。

二年、その間に高町家は少しだけ変わっていった。

それは士郎が退院したこと。彼が帰ってきたことによって桃子にも華やかな笑顔が戻り、高町家がよりよい方向に進んだのだ。日常がキラキラとした空気に包まれなのはを、家族を幸福で包む。

「なのはちゃん、おはよう」

「今日は少しゆっくりじゃない」

「うん、おはよう。すずかちゃん、アリカちゃん」

この朝のやり取りも、それを彩るものになっていた。

そう。ごく平凡な会話ですら、なのはにとってはかけがえのない、大事なものとなり彼女を笑顔にしていたのだ。

しかし、それでも苦しかった。一人になると、苦しかった。

あの頃に比べて背も伸びた。少しは視野も広がった。それでも消えない、自分の中に在るわだかまりが。もやもやと燻って、知らず知らずのうちになのはの心の中を覆っていく。

「……」

自分の無力さが不甲斐ない。

何を目指すべきなのか、分からない。

この気持ちを、どう呼べばいいのか知らない。

「わあああああああああああああ！」

ただこの気持ちを吐き出たくて仕方がなかった。

叫び声をあげたとしても、何もならないと分かっているのに。

「……ガン、ダムさん……」

勇気の意味を教えてくれた人の名を呟く。

縫りたいわけではない。ただもう一度だけ会いたい。会って話をし、そして今の自分を知ってもらいたい。自分の気持ちを知っても

らいたい。

彼女は空を見上げ思いを馳せた。これは些細なきっかけ。

少女が大人になる、その階段を昇るための最初のページなのだ。

思い、空へ（後書き）

第二章の始まりです。

今回はかなり短いうえに、もう一人のキーパーソンが出てこないという……。

でもここは重要な場面だと思うので、あえて載せることにしました。さてこれから少しの間、原作になぞる形になりますが、誠心誠意頑張りたいと思います。それでは、また次回！

手にしたモノ

少女は夢を見た。

それは雄々しく暴れ狂う、この世のものとは思えない異形と、一人の少年の戦い。

傷付き、血を流しながらも、少年は異形に向かい、渾身の力を振り絞る。

その光景を目にし、心の底から少年を気遣いながら彼女は思った。

“この人を、みんなを守れるくらい……強くなりたい”

そして少女は覚醒の時を迎える。

それは彼女の総てを変えていく事件と遭遇する前夜。彼女が不思議な力と邂逅する日の夢であった。

「声……あの子、だったのかな」

手当を受けたフェレットを思い出しながら、なのはは呟いていた。それは学校帰りに起こった事件。何かに呼ばれたような気がして、彼女が向かった先には、傷付いたフェレットが横たわっていた。

その場に居合わせた友人のアリカとすずかに相談した結果、近くの動物病院へと足を運び、手当を施してもらい今は自宅でそのことを考えていたのだ。

「きっとそうだ。わたしの知らない不思議なこと、この世界にはいっぱいあるもの」

優しい色を滲ませながら、なのはは部屋で一人、思いを馳せていた。

それはかつて自分に、家族に訪れた不思議な出来事。見た目も全く違う、しかし強く優しい武人との出会い。それがあつたからこそ、彼女は思わずにはいられなかったのだ。自分があのフェレットを見付けたことは、何か意味があることなのだと。

「……か……れか、きこ……ますか？」

「えっ？この声……」

不意に、何かに囁かれる感覚をなのはは覚えた。

記憶に在る。それはフェレットを見付けた時の、夢を見ていた時に聞いた声。

「お……ます……誰か、この声の……か……」

次に聴こえたのは、先よりもハッキリした声。それは懇願するような響きになのはは聴こえた。

グツと手の平を握りながらなのははその声に耳を澄ます。よりはその声の意志を汲み取りたいと、彼女なりの精一杯がそこにはあつた。

「僕に……僕に力を！時間がない、速く……」

それを最後に声は止み、再び静寂が戻る。

「今の、一体？」

よろけベッドに手を突きながら、どうにか意識を保つのは。同

時に彼女の頭には、ある一つの考えが浮かんでいた。そしてなのは出来る限り早く身支度を済ませ、家を飛び出していた。どうしたらいいのかは分からない。しかし助けを求める声が聴こえたなら、自分に行かなくてはいけない。彼女にはそう思えて仕方がなかったのだ。

「……っ！はあ、はあ、はあ」

走る。街灯に照らされた薄暗い道を。ただ一心に目的の場所を目指して。

さほど距離はないとはいえ、小学生の脚力では時間がかかる。それでも息を切らしながらも彼女は足を動かし続けた。

「はあ、はあ、はあ……み、えた」

程なく街灯とは別の明かりを、なのはの目は捉えた。昼間見た時とは何も変わらないそれを目にし、胸を撫で下ろすのは。しかしその安堵感はその瞬間、真逆のものへと回帰してしまう。

それはまるでいつか見た映画のワンシーンのようで、なのは自身の常識では到底理解できない光景であった。

激しい衝突音と共に、病院の内側から弾け飛んでくる黒の何か。次の瞬間、彼女は直感した。“これは、危険なモノだ”と。手をブルブルと振るわせながら、彼女は現状を把握するために必死に瞳を動かした。

「あ……！」

すると視界に入ってきたのは、数時間前に助けたはずの小さなフレット。黒い物体の衝突を寸でこのところで避けたそれは、迷わずになのはの方へと飛び込んで行く。

自然と差し出される両の手。思わずフレットを受けとめながら、

なのは一目散にその場を逃げだすように駆けだしていた。

「——良かった、届いたんですね」

「やっぱり……あの声、君だったんだ」

自分の胸の方から掛けられた声に、なのはは躊躇することなく答える。

そう。今は彼とお喋りをしている場合ではない。とにかく走れるところまで走るしかない。彼女にはそうするしか、この状況を打破するすべは思い至らなかった。

「ねえ、あれは一体何？」

「君の力を……貸してほしいんだ」

逃げる最中、フェレットに疑問をぶつけるなのは。しかし彼の回答は彼女が想像していたものとは全く違うモノだった。

「わたしの、力？」

「そうです。君には、資質がある」

「資質って……何のことなの？」

「僕は、ある探しものためにこの世界ではない場所から来ました」

彼は続ける。自分の力だけでは目的を果たせないかもしれない。

より大きな被害を出してしまうかもしれない。だから資質の、魔法を使うことの出来る資質を持つ人物に呼び掛けていたと。

その悔しそうな表情から、全く嘘は見受けられない。彼にとってもそれは苦渋の決断だったのである。なのははそう思えたからこそ、素直に彼の言葉に耳を傾けていた。

「迷惑だとは思いますが……でも君に」

「うん。力貸すよ」

フェレットの言葉は最後まで紡がれることなく、なのはの言葉に

遮られる。

その可愛らしい響きを耳にし、思わず彼はハッと顔をあげ、驚きの表情を見せた。

「ほ、本当に良いんですか？」

「……怖いけど、でも助けてほしいっていう人を見捨てておけない」
グッと握り拳を作りながら少女は続ける。きっと父ならば、兄ならば……そしてあの人なら絶対に見捨てていけないと。

拳は、身体全身の振るえは止まらない。目の前に迫るのは異形の生物。それを目の当たりにして恐怖を抱かない者などいないだろう。しかしなのは胸の奥に大事にしまった言葉がある。

「——勇氣は後からついて来るもの。迷うのは誰にでも出来る。立ち止まってちゃ……何も始まらないの」

その大事な言葉を口にし、正面を見据えるなのは。それに呼応するようにフェレットは自身の首にさげていた赤い宝石を彼女に渡し、こう呟いた。

「それを手にして目を閉じて。心を澄ませて、僕の言う通り繰り返して」

「うん……」

手渡された宝石を力強く握りしめ、なのははそう返した。それから伝わる暖かな感覚に、落ち着きの心を取り戻しながら、彼女はフェレットの言葉に耳を傾ける。

「よし、行くよ！？……我、使命を受けし者なり。契約の下、その力を解き放て」

「我、使命を受けし者なり……契約の下、その力を、解き放て」
フェレットの言葉を同じように紡ぎ続けるなのは。そして言葉に

呼応するように手にした宝石は暖かさをより一層強いものにしていく。

「風は空に、星は天に」

「風は空に……星は、天に」

ドクン、宝石が何かを示すように鼓動を打つ。

「そして、不屈の心は——この胸に!!」

何かが重なり合う感覚。それをに不思議に思いながらも、なのは言葉を口にした。手に持つ宝石を指し示す、その言葉を。

「この手に魔法を！レイジングハート、セット・アップ!!」

《Stand by ready・Setup》

響いたのは優しい声。

溢れだしたのは暖かい力の奔流。

少女の手の中で宝石は、桜色の光を放ちながら光の柱を天へと打ちたてていく。その柱は黒に染まっていた周囲を照らし始めた。

「何……これ？凄く、暖かい」

光を手にしなが、独り言のように呟く。今までにないほどの安堵感に彼女は包まれていたのだ。

しかし状況が変わったわけではない。なのはの前で、力の奔流をマジマジと見つめていたフレットは焦りながら、叫ぶように言い放った。

「イメージするんだ！君の魔法を制御する魔法の杖の姿を。君の身を守る強い衣服の姿を！」

その声にはハッと驚きの表情を見せながら難しい顔を見せるなのは。イメージする。『魔法』を制御するための『杖』と『衣服』。あま

りにゼロからのスタートで慣れないながらも、彼女はそれを思い浮かべていた。

強い衣服。勇気の意味を知った、初めて友達を得た時に身につけていた衣服。

魔法の杖。あの武人の持っていた武器に負けず劣らない、力強い輝きを放つ杖。

「——よし、これでっ!!」

なのはの瞳がカツと目を見開かれるのと同時に、桜色の光が彼女を包み込み、その姿を変えていく。なのはの姿は彼女のイメージした『魔法使い』の衣服を身に纏い、ゆっくりと音をたてずにその場に降り立った。

「……凄い、これが魔法？」

変わってしまった自分の衣服を、手にしていたイメージ通りの魔法使いの杖を目にし、あまりの変わりぶりになのはは驚きの表情を見せる。しかし驚嘆している時間も、今の彼女には十分に与えられたものではなかった。迫る異形に顔を強張らせながら、少女はグツと息を飲み込みながらそれを見据える。

そう。彼女は自ら戦いことを選び、魔法の力を手にしたのだった。

ユーノの憂い

「——多大なる成果をもたらしたことは、言うまでも……っと、これでいいかな」

画面上に映し出される文字の羅列を目にしながら少年、ユーノ・スクライアは一人嘆息していた。そこは次元空間航行艦船の中にある一室。彼はそこで今回の事件について、中間報告書を提出するよう、依頼を受けていた。

理由は至って明快である。それは彼自身がこの事件のきっかけを作ってしまったから。しかし元々は彼自身が発掘してしまった遺失物を搜索するだけだったのだが、今やそれだけで説明できるものではなくなっている。数多の次元世界を巻き込み事態にまで発展していたのだ。

「でもまさか……なのはにあれだけの素質があるなんて思わなかったよ」

その中でも最大の要因は、自身が魔法の力を託した少女であろう。少女、高町なのはどこにでもいる普通の小学生。別段身体能力が高いわけでも、優れた技術を持っているわけでもなかった。ただその身に秘めていた魔力量は希有のものであるということは、ユーノ自身にも理解できていたのだ

「でもそれは、あくまで要素の一つなんだよな」

ユーノが語る通り、なのはの強さの要因は『魔力量の多さ』だけで語れるものではなかった。確かにこれまで、それによって様々な

危機を乗り越えることが出来たということとは言うまでもない。しかし彼女には他の誰も持ち合わせていない重要なモノを既に持ち合わせていた。

「正直怖いよ、なのはの一途過ぎるところ……」

用意しておいたコーヒーを口に運びながら、ユーノは誰に語るでもなく、そう呟いていた。

そう。ユーノは頼もしいと思う反面、恐怖すら抱いていたのだ。彼女自身の一途に『力を付けよう』とする気迫に。

それは一人の魔導師の存在が、なのはよりそれを強固なモノにさせたということは言うまでもない。

“フェイト”

そう呼ばれた少女との出会いは、なのはの『強くなりたい』という意志を更に加速させていった。今思えばなのはに出会って、彼女から意見を発したのはそれが初めてだったのではないだろうか、ユーノは考えていた。

今まではユーノの手伝いや他人の危機に対し、彼女は自分自身を顧みずに、身体を痛め付けてきた。

しかしフェイトに出会ってからはどうだ？

彼女と対等に話をするために。

同じステージに立つために。

自分のことを知ってもらいたいから。

友達に、なりたいから。

なのははその一心で、魔導師としての研鑽を積み始めた。

現在ではユーノ自身でも抑え切れるか怪しいほどに、彼女は成長を見せている。

「フェイトの事だけじゃない。きっと、きっと何か別にあるんだ」
カップをデスクに置き、ユーノは再び画面に向かって指を動かした。
始めた。おそらくなのはがあそこまで頑なになる要因。それはおそらく今からまとめる出来事に、その答えがあるのだろうと確信を持ちながら。

それは新たな出会い。フェイトとの戦いの中で突如としてその場に現れた、一人の魔導師と一体の騎士との出会い。
この時大人びて見えていた少女が、初めて年相応の泣き顔を見せたのだ。

「クロノ・ハラウオン……そして騎士ガンダム」

この二人がなのはにとって、どういった存在なのか。
それを聞く事が出来ぬままユーノは一人、指を動かし続けるのだった。

ユーノの憂い（後書き）

今回もかなり短いです。

これから書く部分に合わせても良いかなと思ったのですが、この部分はこの部分で重要かと思ったんで、独立させてみました。今後は断片的ではなく、しっかりと描写していきますので、よろしくお願いします！

再会の時

幾度目の衝突となるだろうか。

二人の少女の戦いは今にもその幕を開けようとしている。二人を見守るユーノとアルフはただそれを見守りながら、何も口にする事はない。いや、言葉に出来ないのだ。それは彼が知っているから。なのはとフェイトが、互いに信じるモノのために戦っている。その先にどんな苦難や後悔が待ちかまえていようと決して諦めることはない。

「わたし、フェイトちゃんとお話がしたいだけなの」

なのはは呟きながら、手にする杖を掲げる。多くの戦いを経て、今少女はようやくしっかりとその言葉を伝えることが出来た。

「私はどんなことがあっても、ジュエルシードを譲ることは出来ない」

そして向かい合うもう一人の少女、フェイト・テストロッサは戸惑いの表情を浮かべながらも、そう返した。自身の手にする黒の杖はフェイトの感情を示すようにカタカタと震えている。二人の間に浮かび上がる魔石は、少女たちの戦いが始まりを今か今かと待つように煌々と光り輝いていた。

そう。同じ目的のため、ジュエルシードを集めるために、二人の少女は戦いの場で何度も相対してきた。血を流し打ちのめされ、どれだけ苦渋をなめさせられようと、なのははそれに耐えながら、フェイトの前に立ち続けてきた。

「——ッ——！」

「————」

一気に脚部に魔力を籠め、疾走を開始する両者。互いの手に持つ杖を今にも打ち合わせんと振りかぶりながら二人は速度を速める。一つのジュエルシードを賭けた戦いがようやく始まる。そう。まさに互いの得物の衝突音が打ち鳴らされんとしたその時であつた。

「——ストップだ！」

その声と共に、響き渡る鉄と鉄の衝突音。

二人の少女の攻防は、間に割って入った二つの影に遮られた。一人はなのはのレイジングハートを片手で掴み、もう一方の影は自身の得物でフェイトのバルディッシュの刃を受け止めていた。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラウオンだ。二人とも、武器を収めろ」

割って入った影の一つ、クロノと名乗った少年は、なのはを正面から見据えながらそう口にした。決して拒否を許さないその口調に、フェイトは素直にその言葉に従い武器を収めた。

「どうした、君も早く武器を退くんだ」

「……は、はい」

しかしなのはだけはクロノの声にすぐ反応できずにいた。

いや、彼の声などより、目の前に現れたもう一つの影に、彼女の心は奪われてまつたのだ。

クロノに導かれるまま武器を収めるのはとフェイト。そしてゆっくりと地上に降り立ちながら、彼は一言こう呟いた。

「さあ、話を聞かせて……」

「クロノ、上だ!!」

荒々しくも、上空からの脅威を伝える声が周囲に響く。

言葉に違わず飛来するのは、夕暮れを思わせる輝く光弾。地上で二人の戦いを見守っていたはずのフェイトの使い魔、アルフはフェイトに撤退の旨を伝えながら、自らその突破口と開こうとしていた。その言葉に従い、視線を上空に向けながら飛び上がるフェイト。狙いはもちろんそこに点在するジュエルシード。

「——防御、任せた！」

飛来する光弾を目の当たりにしながら、クロノは愛杖である『S2U』の先端を上空のフェイトに向ける。自ら防御魔法を展開することはせず、共に現れたもう一人にその総てを委ね、自らは牽制のために上空に魔力弾を放つ。

「でやあああつ——！」

そしてもう一方、迫る光弾に怒号を上げ腰に据えていた剣で持つて、それらを切り崩し弾き返していく。目にしていたなのは、あまりの凄まじさに声を上げることすら忘れ、息をのんでそれを見守っていた。

「くっ！ダメ、だ……！」

クロノの牽制にジュエルシードに近付くことすらできず、フェイトは上空で光弾を打ち続けるアルフと合流する。

「待て！その場から動くな——！」

次弾を撃つ体制をとりながら、クロノは再度フェイトに向かい声を発した。それに困惑した表情を見せる。しかし二人はその言葉を振りほどき、一気にその場から姿を消した。

「——まあ良い。次に会った時は捕獲するまでだ」

「……いくら攻撃されたとはいえ、少女に向かって警告もなしに威嚇をするなど……。少し考えを改めるべきなのではないか、クロノ」

クロノの呟きに、共に現れた人物は苦言を口にしながら一歩近づ

いていく。手にしていた剣を鞘に収め、悲しそうな表情を見せながらその人物は続けてこう呟いた。

「もちろん、君の立場は理解している。出来れば戦わずに済む方法を探したいものだが」

「ああ、甘い事ばかり言ってられないんだ。すまないな、手伝いをさせてしまつて」

上空にあるジュエルシードを確保し、クロノは立ち尽くしていたなのはひと声をかける。

「すまないが、君には話を聞かせてもらうよ……君、聞いているのか？」

「なのは、どうしたんだい？」

ユーノの声にも反応することなく、なのははただ、ただクロノと共に現れた人物をジッと見つめている。

彼女は知っている。

荒々しいがどこか優しさを感じさせる声、掲げられた剣から繰り出される鋭さ。そして何より、その瞳。

「——あ、貴方は……」

「ああ、申し訳ない。名乗るのを忘れていた」

それは、彼女がずっと追い求めてきた人物と瓜二つ……いやなのはには同一人物としか考えられないほどであった。

そしてなのはの前に立った人物は自らの名を口にするのだった。彼女にとって、大きな意味を持つその名前を。

「私は騎士ガンダム。故あって今はクロノたちと行動を共にしている」

「ガンダム、話は後だ。艦長がすぐに戻るように言っている」

クロノの声に分かったと返し、なのはの手を引きながら、騎士ガンダムは颯爽と歩き始めた。その手はやはりかつての記憶に残ったまま、とても暖かなモノに彼女は感じられた。

「やっぱり、ガン、ダムさん……だ」

そう呟き、二人の後についていくのは。この時、彼女の頬を一筋の涙が零れ落ちる。

それを知るのは唯一、彼女の肩に佇む彼女のパートナーのみだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8773v/>

魔法戦記リリカルなのは異伝 光と闇の勇者

2011年11月15日17時50分発行